



## ⑱ 『「神様」のいる家で育ちました ～宗教2世な私たち～』

菊池真理子さんの『「神様」のいる家で育ちました ～宗教2世な私たち～』(文芸春秋、2022)はタイトルにある通り、親が宗教を熱心に信仰する家庭で育った人たち＝「宗教2世」の生きづらさを描いた作品です。

親は世の中にあまたある宗教の中から、自身で信仰する宗教を選ぶことができます。しかし熱心な信仰をもつ親のもとに生まれた子どもには、宗教選択の自由以前に、当たり前のものである「親の宗教」が全ての前提となります。子どもにもものごころがついて「信仰の自由がある」と気づくまでには多くの時間がかかります。そのため、親が信じる宗教の教義は、子どもの心の奥底に染みわたり、子どもの人生を縛ることがあります。

乳幼児期の子どもにとって親は愛着形成の対象です。子どもは、親との濃密な二者関係を経て、第三者である親以外の人たちとの関わり方を身につけていきます。ものごころがつかない間は、子どもにとって親は生き方のルールブックのような存在です。親は子どもの健康や幸福を願い、子どもにも同じ信仰をもつよう勧めます。子どもは当たり前にある環境に適応し、親が信じる宗教以外の存在を考える機会を十分に持たないまま、自然と親にならって同じ信仰をもつことになりがちです。親に愛されたい思いも、親の信仰に追随する動機になります。

親が信じる宗教の価値観が、世の中の一般的な価値観と大きな違いをもつ場合でも、子どもは当初、親の信じる宗教の価値観に従うことでしょう。しかし成長につれて、宗教と世の中の価値観との間で、葛藤に苦しむことになる場合が少なくありません。

「宗教2世」は思春期や反抗期、学校の教師やクラスメイトとのやりとり、就職や結婚な

どの機会に、自分の親や家族が他の人たちのそれと違うことに気づかされることが多いようです。もちろん多様な価値観があっていいのです。しかし、世間一般の価値観を悪いもののように扱う宗教の場合、世間一般に評価されているものに惹かれる気持ちをどう扱っていいか分からず、極端な自己否定をするなど、生き方をこじらせてしまうことも起こりやすくなります。

菊池さんの作品では、様々な信仰を持つ家庭で育った 2 世が登場します。林間学校に参加することはよくても「キャンプファイヤーはダメ」だったり、「神を賛美する歌」以外を歌ってはいけなかったり、恋愛感情を持つことはもちろん、「他人から好かれることまで禁止」される子どもが登場します。

宗教内でしか通用しない価値観の下で日々を過ごして、自分の意思と関係なく宗教に入れられて。みんなの方がずっと幸せそうに見える。学校にも社会にもなんだかうまくとけこめない…話したら変な目で見られそう。

脱会したら親は二度と愛してくれないかも。親から逃げても組織は追ってくるかも。そして自分の中にも「もしかして天罰が下るかも」という思いが…。(「はじめに」より)

他者に悪感情を向けることや、批判すること等、伝統的な宗教にも禁止事項はあります。慎み深い、良い言動を心がけることは一般的な価値観にも合致しますが、強い信仰心の結果、あまりにも理想と本心が乖離してしまうと、バランスが崩れてしまいます。人を救うはずの信仰が、家族を壊してしまうことがあります。

カルト宗教の場合は、大人であっても冷静な判断ができない状態に追い込まれて入信させられていたり、マインドコントロールや高額献金を強いられる問題があるなど、別種の対応が必要です。しかし一般的な宗教の場合にも、「宗教 2 世」の問題は起こり得ます。教義が一般的なものであっても、親の信仰の仕方が極端なものであれば、子どもが世間との間で感じる葛藤は大きくなるでしょう。

人はなぜ、宗教に過度にのめり込むのでしょうか。夫婦関係や親子関係など、実際の自分の身近な家庭環境が思わしくない場合、宗教に救いを求めたくなるものです。目の前にある家庭や周囲の人間関係から一時的に目をそらし、別種の理想のもとに自分の価値を確かめることができるのかもしれませんが。

真理子の母親はある宗教団体に入っていた。宗教団体が発行する新聞に購読ノルマがあったのか、母親は信者仲間から頼み込まれる。「どうしても新聞啓蒙しなきゃいけないの」「ご主人、お友達たくさんいるんでしょ」…。手を合わせてお願いされた母親は「ちょっと待ってね」と席を立つ。

部屋の外で電話をかける母親。「ええ、新聞をまた。なんとか 1 カ月だけでも…」。

部屋に戻った母親は「4件とれました」と伝える。「すごいわあ、私たちが1日歩き回ってもとれないのに」。信者仲間から褒められた母親はしばらく談笑していたが、仲間が帰った後、泣きながら怒り出す。「私がどんな思いで頭さげてると思ってるのよ！」

母親は少しずつ不安定になっていく。真理子たち姉妹のケンカに怒って、家から追い出すことが多くなる。心身をすり減らしながらも、毎日毎日、雨の日も、宗教新聞を配布する。選挙の運動員としても働きながら、信仰を続けた末、真理子が14歳のときに母親は自死してしまう。（「第7話」より）

強い信仰心を持つ親にとって、自分と同じ信仰を持つ子どもを見ることは大きな喜びになります。しかし、それは子どものありのままの姿ではないかもしれません。「子どものありのままか、もしくは信仰か」。この二者択一を、親が子どもから求められた場合、熱心な信仰をもつ親であるほど、信仰の方を選んでしまうケースが多いように思われます。親はその上で、自分が正しいと信じる信仰に、子どもを従わせようとします。結果的に子どものありのままの心は否定され、抑圧されてしまうのではないのでしょうか。

家庭や宗教のコミュニティにいる自分と、学校や一般社会にいる自分の間で引き裂かれ、どこにアイデンティティをもてばいいのか分からなくなってしまった「宗教2世」の中には、鬱や吃音などに苦しむ人もいます。親は信仰で子どもの苦しみをなんとか解決しようと思いますが、子は親の信仰の強さによって、一層苦しむことになるかもしれません。

母親が熱心な信者の仁奈は、母が運転する車で、月に2度は本部に連れられていった。「何が宗教の教えで、どれが母の考えで、どこからが私？ だんだんわからなくなっていく——」。「信じ切っていないのに私は連れられてここにいる。いるだけでなぜか何かを削られていく」。もう行きたくないと伝えた仁奈に、父親はダメだよ、という。「信じてなくてもいいからお母さんにつきあってあげなさい」。仁奈は涙を流して気づいた。「ああ、削られてるの、ひとりの人間としての私の権利だ。みんなが当然持っている、何を信じて何を信じないか決める権利を、私だけ持ったことがない。それがこんなにつらいんだ」。（「第6話」より）

アトピーで苦しむ洋介。「薬は毒」という教義から、家族はステロイドの使用を認めない。「アトピーの人は前世で人を焼き殺している」と教えられ、洋介は道場に毎日通うこともあった。思考放棄して教義を都合よく使う親の姿に違和感を募らせた洋介は、社会人になって数年後、やっと「宗教やめるよ」と母親に告げることができた。母親はがっかりして力を失い、そっぽを向く。「そういう顔させたくなくて、子どもの僕は頑張ってきたんだ。ただあなたを喜ばせたかった。あなたを笑顔にする方法は宗教しかなかった」。（「第2話」より）

「宗教2世」の問題は「毒親」や「共依存」の問題に近い構造をもっているように思われ

ます。親が自分の信仰をもつことは自由です。また自分の子どもが、自分と同じ信仰を持っている姿を見ることができれば、大きな満足感を得られるものでしょう。しかし、それは子どもに依存することになっていないでしょうか。子どもがある程度の年齢まで、親に依存するのは当たり前のことです。しかし親が、自分の幸せのために子どもを利用しているとすれば、それはやがて、気づかれにくい虐待に姿を変えるかもしれません。

紹介作品：

菊池真理子（2022）『「神様」のいる家で育ちました ～宗教2世な私たち～』文芸春秋

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考サイト：

@DIME 【私たちの選択肢】宗教にのめり込む母、アルコールに溺れる父、漫画家・菊池真理子が経験した「宗教2世」問題 <https://dime.jp/genre/1251273/>

@DIME 【私たちの選択肢】自動的に信仰させられていた「宗教2世」はいわば被害者です <https://dime.jp/genre/1254120/>

週刊エコノミスト online 連載中止になった菊池真理子氏のコミックを単行本化＝永江朗 <https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20220927/se1/00m/020/015000c>